

素敵なパートナーとなるために

最近、町広報を開くと「行財政改革」「再構築プラン」「協働」など、いかにもお役所らしい言葉が繰り返し使われ、「なんだかおもしろくない!」「また行革記事なの」「自分には関係ない」なんて感じている町民の方も少なからずいるかもしれません。そうです。文字だけ見ていると、とても身近になんて感じられないかもしれません。

でも、何回もお伝えしている「再構築プラン」には、多くの町民の方々が様々な形で参加して意見を出し合い、協議を重ねて完成したプランです。今後さらに多くの皆さんが関わることが大切になります。

「でもやっぱりわたしにできることはないし・・・」と思っていないませんか。そうは思っても、今のままの当別に満足していませんか。市街地に活気がないとか、子供の遊び場がないとか、集う場がないとか、何かしら不満に思っていることってないですか? 反対に、当別ってこんな良い場所があるのにみんな知らない、この活動っておもしろいなんて思っている方もいるかもしれません。そんな良いこと悪いこと小さなこと、自分だけが思うのではなくみんなの共通の話題にしませんか。

みんなで話し合い、アイデアを出し合い、実行していく、難しいことかもしれませんが、町内ではそんな活動を実践している団体も数多くあります。また、「協働」という形で、住民と行政が様々な活動を行っている自治体も数多くあります。

町では8月に2回にわたって「協働セミナー」を開催し、他の自治体や町内で元気な活動をしている方々の話を聞く機会を設けました。そんな内容をヒントにしながらかつ別町らしい「協働のあり方」を皆さんと考えていきましょう。

このまちをつくっていくのは、一部の限られた人ではなく、ここに暮らす町民皆さんのからです。

どうして協働なの?

これまで、行政は多様化する住民ニーズに対応するため、行政サービスの拡大を続けてきた傾向があります。

しかし、少子高齢化や高度情報化の進展など時代が大きく変化し、住民ニーズがますます多様化する中で、全てのニーズに対応することは困難となっています。

このため、これまでの行政主導型のシステムを見直し、住民(町内会・ボランティア団体・企業など)と行政が、それぞれの特性に応じた役割を分割する「協働によるまちづくり」の考え方が注目を集めています。

協働って何?

決まった定義はありませんが、「住民の皆さんと行政とが、共通の目的のもとに、地域の公共的な課題を解決するために、対等の立場で、共に協力して取り組むこと」と言うことができます。

協働のパートナーはもちろん町民です。町内会活動でがんばっているあなたも、ボランティアに汗を流すあなたも大切なパートナーです。

もう協働は始まっているの?

町では、協働の指針策定検討委員会での検討、提言をいただきながら、来年9月頃までに協働のルールづくりとなる「協働の指針」を策定する予定です。

策定の経過は、町広報や町ホームページで随時お知らせします。また、協働に関するご意見もお待ちしています。

▼担当 企画課企画調整係 (☎23 - 2393/FAX25-5555)

Eメール gyokaku@town.tobetsu.hokkaido.jp



協働によるまちづくりセミナー

8月2日(火)に「ゆとろ」で開催した、第1回セミナーに約150人が参加し協働のまちづくりについて共に考えました。

セミナーでは、長野県栄村の「田直し事業」「道直し事業」「下駄ばきヘルパー」など住民と行政が協働で公共サービスの実施に取り組むユニークな事例が紹介されました。

また、町内で福祉や環境、イベントなどの活動に携わっているパネラー3人によるパネルディスカッションを行い、それぞれの活動を通して問題提起や指摘がありました。最後に、コーディネーターにセミナーをまとめていただきました。



◇事例紹介◇
長野県栄村職員 齋藤保さん
「協働」とは目標に向かって力を合わせていくこと

ロータリー除雪車が入れない場所の道路改良を進める際に、公共工事の設計書まで作っていても、遅くなるし経費もかかる。栄村では、村道であっても、住民にとつて共通の財産であり、自分たちが利用するのだから、自分たちで維持管理するのが当然という考え方が根付いている。

このため、「道直し事業」では、用地提供、用地交渉は地域でやってもらい、現場監督も地域の住民が行う。地域の負担を地域の皆さんで話し合っていたら、合意の得られたところを、村が道路改良工事を進める。

行政と住民が同じ方向を向いて一つの目標達成のために力を合わせていくことが「協働」と考えている。行政だけが一方的にお膳立てしても限界がある。従来の公共事業は、行政が一方的にやってきたことが多かったのではないかと感じる。

様々な人が集える場が必要



老人クラブ連合会
会長 高木 稔美さん
空き店舗を活用するチャレンジ

シヨップで、高齢者が中心となって地元野菜の直売をする取り組みを始め、店に高齢者の集える場所を設けた。高齢者が健康でいることが町のためになると思っている。

町の中には、高齢者の集える場所が少ないのが現状。以前から、高齢者サロンとして、自宅を開放しているが、子供から障がい者、高齢者まで広く集える場所となることを目指している。

頼りになるお隣さん同士に



商工会女性部
部長 石本留美子さん

以前は、例えば、学校の遊具のペンキ塗りや除雪などを保護者が行っていたが、今は、行政任せになっており、それが当たり前になっていったのではないかと。また、いざというとき、最初に駆けつけてくれるのは、隣近所。町内会で子育て支援や高齢者のボランティアに取り組むことが必要ではないか。自分のできることからやれば、このまちは少しでも良くなると思う。

セミナーを終えて

コーディネーターから



北海道医療大学
看護福祉学部
教授 横井 壽之さん
協働によるまちづくりを進めていくには、

将来の子供たちにとどのような地域を作るかを考えることが基本となり、世代を越えて、まちづくりに参加する具体的手だての見つけ方、ネットワークや場所をどうするかがキーワードとなる。

セミナーでは、まちづくりに参加したいと思う人をどうやってネットワークしていくか、町民と行政がどのように関わるかを一緒に考えるための第一歩となったが、具体的な進め方については、現在、策定を進めている協働の指針づくりを通じて議論していく必要がある。

団体同士のつながりを広げて



プレシヤスネット
代表 松岡良尚さん

小学生を対象にした自然体験活動など青少年育成事業などを行っている。

町内でも多くのボランティア団体などが活動をしているが、お互いによい活動をするのかよく分からないので、団体同士のつながりがあれば、活動が更に広がっていくのではないかと。協働によるまちづくりを進めるためには、リーダーを養成する機会を設ける必要があると思う。